

私が日本で生きてきて学んだこと

What I have learned being born and raised in Japan

ファサン マーベラス

Marvelous Fasan

悲しい思いをした小中学校での日々

私はナイジェリア人の両親を持ち、2004年に東京で生まれ、幼稚園・小学校・中学校・高校とずっと日本で通いました。ナイジェリア人の両親の元に生まれましたが、周りの環境がすべて日本だったため、日本語のほうが早く話せるようになりました。話す言葉や周りの人たち、住んでいるところも日本人同様のものでした。しかし、日本人とほとんど変わらない生活を毎日送っていたにもかかわらず、小中学校では常に外国人、部外者扱いをされていたため、その時期の経験は決して良いものではありませんでした。

みんなと肌の色が違うという理由だけで避けられたり、変なあだ名で呼ばれたり、周りの子とは違う扱い方をされたりしました。この時期は友達も少なく、学校ではほとんど一人で過ごしていました。両親にこのことを相談するといつも「大丈夫。いつかすべてが良くなるよ」「何をされてもその人たちを悪く思うんじゃないで、その人たちのためにお祈りをしなさい」と言われました。私はクリスチャンの家族に生まれたので、この言葉には慣れていましたが、やはりなかなか納得がいきませんでした。友達はいないし、独りぼっちだし、悲しい思いをしているのに、どうしてその人たちのために祈ったりしなければいけないのかと常に疑問に思っていました。神様を信じ、両親の言葉に従うようにしていました。

ナイジェリア訪問と自分への自信

中学3年になり母国ナイジェリアに行く機会がありました。この時ナイジェリアに行けたことを今でも神様や両親にとっても感謝していて、いつまでも忘れられない経験だと感じています。日本からナイジェリアに行くのに、カタールのアブダビを経由して行きました。日本からアブダビ行きの飛行機には、いろいろな国のさまざまな肌の色

の人が乗っていました。しかしアブダビからナイジェリアへの飛行機には、9割以上が私と父と弟と同じ黒人の方々にいっぱいでした。これまで日本に住んでいて、周りが日本人の中に自分1人だけ黒人という経験しかしてこなかった私は、その瞬間、普段感じていた孤独や仲間外れなどの違和感が消え、帰属を感じる事ができました。とてもあたたかい気持ちになりました。

ナイジェリアには2週間弱というわずかな期間しかいませんでしたが、とても気持ちよく過ごすことができ、自分のルーツを知り、自分と似たような人たちと一緒に過ごしたことによって、初めて自分のルーツや文化的背景に自信を持つことができました。この経験のおかげで日本に戻った後、髪形や肌の色などに関して誰に何を言われようと自分に自信を持ち、残りの中学校生活を自分らしく堂々と過ごすことができました。

多様性の中で学べた高校時代

小中学校では大変な経験をしましたが、高校生活はとても楽しく、充実した時期になりました。もちろんそれまでの学校生活と比べると高校のほうが忙しく、やることも多く、疲れたりストレスがたまったりもしました。しかし小中学校で経験したアイデンティティーの問題や孤独を感じることはありませんでした。

その要因の一つは、多様な文化的背景を持つ生徒の多さと多様性の考え方を勧める学校のカリキュラムがあったからです。私の通っていた筑波大学附属坂戸高校には、海外にルーツを持つ子や日本のインターナショナルスクールに通っていた生徒が多くいるスーパーグローバルクラスがあったり、外国籍の生徒向けの入試があったり、授業でも日本のことだけではなく、日本と世界を比較したり、グローバルな課題の解決策を考えたりするなど、普段の学校生活から幅広く多様な学びをしていました。そのおかげで周りも視野が広く、多様な経験を持ち、

ファサン マーベラス：日本生まれ日本育ちのナイジェリア人。2004年に東京で生まれ、小中高と日本の学校に通う。高校は埼玉県の筑波大学附属坂戸高等学校に通い、卒業研究で「海外にルーツを持つユースのアイデンティティー」をテーマにし、その後も活動を続けている。カナダの大学で幼児教育を学ぶために留学準備中。
インスタグラム：@mirac_le1014 @thirdculturekids13914

多面的な考え方ができる人がほとんどでした。

また、私が周りから受け入れてもらおうとするのをやめ、自分のルーツについて学び、自信を持ち、自分を受け入れられるようになったことも要因の一つだと感じています。

経験から学んだ二つのこと

そんな私がこれまでの経験から学んだことは二つあります。

まず一つ目は、自分のルーツを知り、自分で自分を受け入れてあげることです。小中学校ではずっと周りに受け入れてもらおうとしたり、周りに溶け込もうとしたりしていたため、なかなか自分の良さに気づけませんでした。しかし、中学3年でナイジェリアに行き、自分のルーツを知ったとき、私は自分を受け入れることができ、自分に自信を持てるようになりました。日本で生まれ育ち、日本語が十分話せて、国語で100点をとっても、帰化して書類上は日本人になったとしても、見た目が外国人だったら残念ながら日本人にとってはずっと外国人。だから自分を日本人に似せようとせず、ありのままの自分であることが一番大切だと思います。

二つ目は、何があってもどんなにつらいことがあっても、諦めないということです。日本に住んでいる限り外国人は、在留資格の申請や帰化申請など時間のかかる複雑な申請をしたり、不自由なことや大変なこと、つらいことが起きたりすることもあります。そんな中でも「もう日本飽きた!」「もうやだ!」と言ってすべてを諦めるのではなく、申請なら良い結果が出るまで申請し続けたり、学校や仕事などでの人間関係ならポジティブシンキングで相手に接したり、とにかく前向きに考えていくことです。なぜなら諦めずに頑張った先には、絶対に良い結果が待っているからです。

本当につらい時は、ポジティブシンキングや忍耐力はなかなか難しいと思うので、そんな時は周りにいる自分と似た背景を持つ人に相談したり、そういう人たちとつながったりすることがよいと思います。もし周りにそのような人がいなければ、ぜひ私に連絡してくださいね!

そして、自分の経験を踏まえて一番伝えたいことは、次のことです。

聖書の一節に「夕暮れには涙が宿っても、朝明けには喜びの叫びがある」(詩篇 30:5)とあります。解説すると、「一晩中ずっと涙を流すこともあるかもしれないが、翌朝とともに喜びがやってくるという意味で、長い間ずっと大変なことや嫌なこと、つらいことや落ち込むことが続くかもしれないけど、悲しみには必ず終わりがあり、すべてを晴らしてくれる喜びや良いことがいつかきつとやってくる」ということです。

だから、日本にいる海外にルーツのあるみなさん!



イベント開催に協力してくれた高校からの友人たちと
2023年7月15日 東京羽村市

いつかきつとうまくいく日が来ます! それまでは、自分のルーツを知り、ありのままの自分を受け入れ、小さな喜びをばねに諦めずに前に進んでいきましょう!!

両親への感謝と私の取り組み

最後に、私が小中学校でいじめにあったり、自分自身について何度も悩んだりしながらもここまで来られたのは、神様と神様が与えてくださった両親のおかげだと思っています。両親はいつも励ましてくれたり、アドバイスをくれたり、日本生まれ日本育ちでも自分のルーツを忘れないようにしてくれたりしました。そんな両親は神様から私への贈り物だと思って、いつも感謝しています。

私も父や母のように、将来の自分の子をはじめ、次世代の日本の海外にルーツを持つ子どもたちのために、いろいろな活動をしていきたいと考えています。

その第一歩として、高校3年の時の卒業研究で、「在日外国人の青年期における文化的アイデンティティーの形成について」というテーマで研究し、文献を読み、日本に住む TCK (サード・カルチャー・キッズ) を対象としたアンケート調査やディスカッションを行いました。そこで、日本に住む海外にルーツを持つユースのアイデンティティーについて考え、つながりを作ることができました。

そして、2023年7月15日には、'Let's talk Cultural Identity' という海外にルーツを持つユースを対象としたイベントをホストし、35人が参加しました。今回はアフリカ日本協議会 (AJF) の協力を得て開催し、参加者の方々と文化的アイデンティティーに関するディスカッションを行ったり、みんなでゲームをしたりして、とても楽しい時間にすることができました。今後もつながりを広げ、心の支えになれるような活動を続けていきたいと思います。